

Mountaineering

—The Freedom of the Hills, 8th ed. —

山岳書の専門コーナーを覗くと、ありとあらゆるジャンルの技術書が花盛りである。曰く「〇△クライミング技術」、「〇〇沢登り入門」、「△△アイスフォール・テクニク」、「フリークライミングの〇〇」、「〇〇氷雪技術」等々。ジャンル別のガイドブックにも事欠かない。登山の裾野が拡がり、それだけ各ジャンルの領域も世代を越えて深まっていることの証であろう。

これはこれで結構なことではあるが、一方で登山という全体的営為(重箱)を別々の四隅からつつく風潮を助長してはいないだろうか。勿論、ジャンル別技術書を否定するつもりは全くないし、登山という行為は個人個人の自由であって、好みもまた千差万別であるから他人がとやかく言う筋合いではないが、私のような古いタイプの人間にとっては、登山とは溪あり、岩あり、氷雪あり、なだらかな尾根歩きや草原での憩いありというような種々のタイプが複合されて初めて山登りという営為の環が完結するように思えるのである。

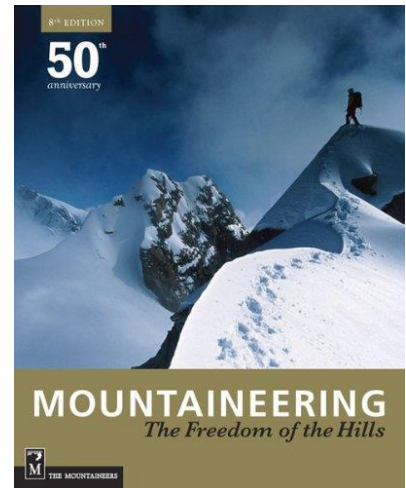
このような観点から再び書店の山岳書の棚に戻って見ると、一貫した思想と体系のもとにトッレキングの初歩から氷瀑登攀やミックスクライミングなどを含んだ最新技術までを一冊に纏めた技術書を見つけるのは甚だ困難であることが分かる。総論はあっても総花的で、各論はあまりにもテクニクだけに偏っているように思える。

この本は、オーバーオールな登山の教科書として 1960 年の出版以来 5 カ国語に翻訳され、世界的に愛読されてきた技術書であるが、最新の考え方や登山技術・装備を取り入れて第 7 版として 2003 年に大改訂され、2010 年には 50 周年記念出版として第 8 版が最新版として出版された。

本書は登山という営為を『自分自身や他人や環境を害することなく、登山するために必要なスキルと装備と力を持って、山にあることの個々の素朴な歓びを総合した概念』と定義し、“全て自己責任のもとに”、“安全を何よりも優先し”、“山の自然環境や山岳地帯に住んでいる人々のコミュニティーを破壊することなく”登山の高みを目指すという通底思想のもとに編集されている。書かれている内容が初歩のレベルから経験者レベルまで網羅されており、またジャンル也多岐にわたっているために一見百科全書的にも見えるが、その記述は詳細で、登山の理念は深遠である。これから登山を始める人の教科書としても、またベテランが更なる高みをめざすための技術書としても役立つと思う。

アメリカで発行された本であるから、登山に対する考え方や登山のお国事情が日本と異なっている部分もあり、我々日本人にはやや奇異に感じられる記述もあるが、彼我の登山事情や考え方を比較してみるのも興味深いことである。また、邦書ではあまりお目に掛かれない氷河登高技術の解説も貴重であろう。海外登山に出掛けられる方々には、現地での異国の登山者とのコミュニケーションにも役立つのではなかろうか。邦訳本は無いが、文章は平易で読み易い。

日本語バージョンを発行すれば大方の役に立つのではないかと思います、第 7 版の和訳本の出版を山岳関係の 2, 3 の出版社に持ちかけてみたが、「マ、せいぜい 50 冊も売れば御の字ですよ。これでは 1 冊 5 万円で売っても真っ赤な赤字」と取り付くシマもなかった。細かい字で印刷された 600 ページの大冊であり、邦訳すれば 1000 ページくらいにはなるから、ご尤もなことではある。そういう訳で半分くらいまでは出版用原稿に訳出してみたが、その後はそのままになっている。マ、いずれ暇にまかせてホームページにでも掲載したいと思うが、さすれば今度は著作権が引っかかることになるから、所詮



(第 8 版)

実現の可能性はゼロでございます。悪しからず。

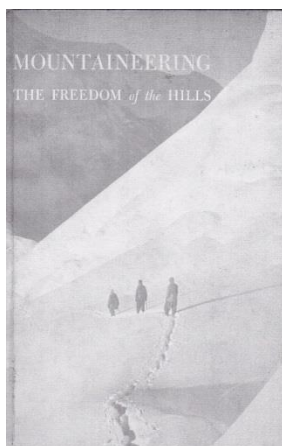
マ、ガード下のヤキトリ屋の1回分で間に合いますので原書を買って英文でお読み下さい。

[第8版] *Mountaineering: the freedom of the hills*/edited by Ronald C. Eng -8th ed.

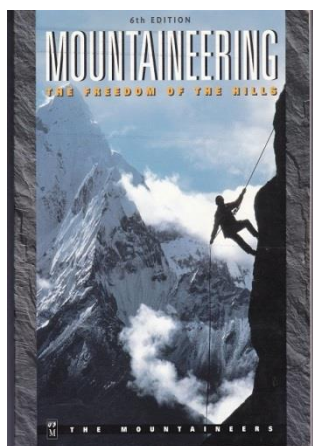
\$29.95 U. S.

[補記]

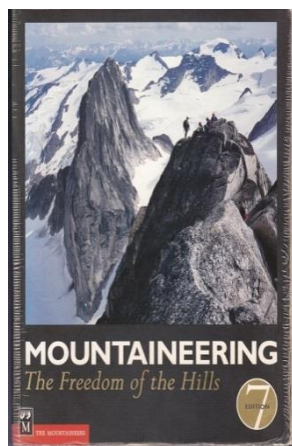
別稿『山道具今昔』『登山の技術書』でも触れたが、この本は創刊号からの50年間の書影の推移だけ見ても、それぞれの年代の登り方などの変遷が分かるので以下に書影を掲げておきたい。



(初版、1960年)



(第6版、1997年)

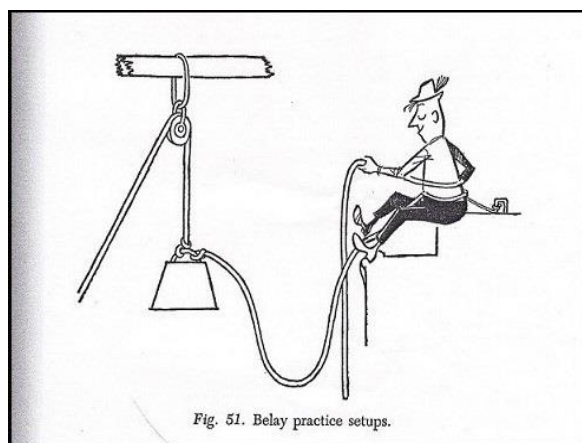
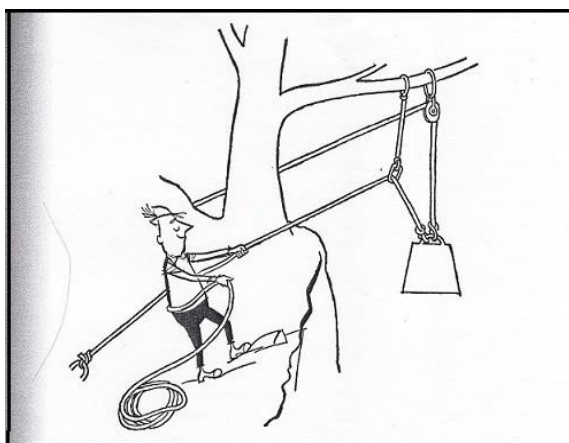


(第7版、2003年)



(第8版、2010年)

また、50年前の墜落停止の練習方法がどのようなものであったか、初版から下に引用しておく。当時は確保器などというものは無かったので、今では過去の遺物となってしまった腰絡み法が使われているが、練習システム自体は今も変わっていないことが興味深い。



[「山書の小溪」目次に戻る](#)

[『トップページ』に戻る](#)

